〔東京家政大学研究紀要〕第55集（1），2015，pp.31～38〕

# 保育におけるピアノ使用の源流をたどる
## ―明治初期の幼稚園における唱歌とその伴奏楽器について―

西海　聡子

（平成 27 年 1 月 7 日査読受理日）

# The First Use of Piano in Kindergartens
## ―“Shoka” and its accompaning instruments at Kindergarten in the beginning the Meiji period―

NISHIKAI, Satoko

（Accepted for publication 7 January 2015）

キーワード：ピアノ伴奏，伴奏楽器，保育唱歌，松野クララ，東京女子師範学校附属幼稚園
Key words：piano accompany, accompany instruments, “Hoiku Shoka”, Clara Matsuno, Kindergarten of Tokyo Women’s Teacher Training College.

### 1．はじめに

日本においてピアノ（オルガンを含む）は保育に必要な楽器として定着し，その演奏技術は保育者に必要な専門的能力の一つとして重視されている．例えば，2011 年に実施された調査研究[1]においても，養成校（短期大学）や幼稚園では，保育職の専門的能力として「ピアノの技術」を重視するという結果が出ている．日本では過去に，幼稚園にはピアノ又はオルガンの設置が義務付けられていた[2]という経緯もあり，今日でもなお幼稚園の保育室にピアノが置かれている園は多い．この日本の幼稚園に見られるピアノの普及と保育者の専門的能力としてピアノ技術が必要とされる現状は，いつ頃から何によって形成されたものなのだろうか．

筆者はこの問いに対する答えを導くにあたり，本稿では，幼稚園の創成期にあたる明治初期に焦点をあて，保育におけるピアノ使用の源流をたどることを目的とする．

明治期のピアノ教育史をテーマとする先行研究には，中等教育機関を中心としたピアノの導入については市川理恵（1995）[3]が，音楽取調掛や東京音楽学校など音楽の専門機関で行われたピアノ教育については，国府華子（1999）や市川理恵（1996，1999）等による論考[4]が見られるが，保育の場や保育者養成という視点に立ったものはいまだ見られない．

また，これまで多くの研究者が，明治初期の保育や唱歌教育について優れた研究[5]を蓄積し，それぞれの文脈で保育におけるピアノ使用の記述は見られるが，点在したものである．そこで筆者は，保育におけるピアノ使用という一つの視点で，点在した史実を集約し，保育におけるピアノ使用の源流をたどりたいと思う．

ここでの明治初期とは，東京女子師範学校附属幼稚園の開園にあたる明治 9（1876）年から明治 20（1887 年）頃までとし，その期間を研究対象とする．

### 2．東京女子師範学校附属幼稚園における初めてのピアノ使用

はじめに，明治初期のピアノの導入状況について確認しておきたい．武石（2009）は，明治初期に公のルートで輸入されたピアノについて購入の経緯とメーカー，台数について調査し[1)]，「明治 9 年に幼児教育用のピアノが 1 台，明治 11 年から 12 年にかけて体操教育用に 6 台（そのうち 4 台は確実にチッカリング製），そして明治 12 年夏に音楽教育用にクナーベ製が 10 台，いずれもスクエアピアノが購入された」[2)]ことを明らかにしている．「幼児教育用のピアノ」は，東京女子師範学校附属幼稚園に，「体操教育用」は体操伝習所に，「音楽教育用」は音楽取調掛に購入されたものを指し，「明治初期，ピアノは日本の公立学校の幼児教育・体操教育・音楽教育という三分野にわたって，それぞれの教育機関の立ち上げと共に導入された」[3)]という．

このように，東京女子師範学校附属幼稚園には，明治 9（1876）年 11 月の開園当初からピアノが設置されていたと考えられる．

明治 12（1879）年夏，本格的な西洋音楽の導入のため音楽取調掛に招聘されたメーソンがボストンから送った 10 台のピアノよりも先に，つまり，まだ日本に西洋音楽がほとんど入っていない頃，舶来品である高価なピアノを東京女子師範学校附属幼稚園が導入したという事実は興味深い．

日本で最初の唱歌が誕生したのも幼児教育の分野であっ

東京家政大学短期大学部保育科

た．中村正直は，「唱歌は緊急の教科であり，女子教育と幼稚園の保育に特に貴重な教科である」として，宮内庁式部寮に歌曲の作曲を依頼する．

> 唱歌ハ緊要ノ一教科ニシテ女子ノ教育ト幼稚園幼稚ノ保育ニ至テハ殊に諸教科中ノ貴重ナルモノナリ（中略）因て式部寮ノ伶官ニ嘱託シテ歌曲ヲ撰成セシメ先ツコレヲ幼稚園幼稚ノ遊嬉ニ用ヒ次テ本校生徒ノ正課ニ充テントス[4)]

宮内庁式部寮はこの申し出を受け，保母が作った歌詞に雅楽課伶人が雅楽調の旋律をつけ，開園式のために《風車》と《冬燕居》という2曲の『保育唱歌』を作成した[5)]．

明治10（1877）年11月6日，東京女子師範学校附属幼稚園では，雅楽課伶人から保母に対して唱歌の伝習が実施される．日本で初めての唱歌の授業である．

> 十一月六日始メテ唱歌ノ一科ヲ幼稚園ニ実施シ，式部寮ヨリ伶人ヲ招聘シ保姆等ニ唱歌音楽ヲ伝習セシム．唱歌ハコレヲ国歌或ハ西洋詩歌ニ采リ，一種ノ音節ヲ成ス者ニシテ未タ完全ナル能ハスト雖モ，他日之ヲ待テ漸次修繕スル所アルヲ期スルナリ．楽器ハ仮ニ洋琴及ヒ和琴ヲ用フ[6)]．

これは『文部省第六年報』にあり，筆者は，日本初の保育の場におけるピアノの使用に関するもっとも古い記述ではないかと推察する．この時，唱歌の伴奏楽器には，洋琴（ピアノ：筆者註）と和琴（日本古来の楽器である6弦の琴：筆者註）を用いている．

この『保育唱歌』の伝習は，皇后宮，皇太后宮を迎えての正式な開園式に向けての準備であり，同年11月27日の開園式でこの成果は披露された．その様子を伝える当時の新聞記事から，一部を引用する[6]．

> 東京日日新聞（明治十年十一月廿八日水曜日）
> 幼児唱歌し保母音楽を奏せしかば（此の唱歌は新調にて委しきは後号に譲る）園中にさんざめき渡りて面白かりければ御気色もいとめでたかりき
>
> 読売新聞（明治十年十一月廿九日木曜日）
> 園中にて和琴とピアナ（原文ママ）の合奏は盤渉調にて幼稚の者が拍子を取て旋りながら唱った冬燕居という歌は「いかばかり雪や霰のはげしきもよしや我には親しかる友のまとゐの楽しさに心たらはぬことしもぞなき」また遊戯の歌は一越調にて「風車風のまに〳〵只めぐる止ず旋るも〳〵水車水のまに〳〵只旋るやまずめぐるも〳〵」とうたひ両宮も是らには殊に御感あって御機嫌よく掛りの人へは端物一反づゝ幼稚の者へは御菓子一折づゝを賜はりました．

新聞は，保母による和琴とピアノの演奏に合わせて，《冬燕居》は拍子をとり廻りながら《風車》は遊戯しながら幼児が歌い，大変楽しい雰囲気であったことを伝えている．ここでも唱歌の伴奏楽器は，和琴と共にピアノが用いられている．

このピアノを弾いたのは誰か．『日本幼稚園史』によれば，「西洋楽器としては，本校，幼稚園を通じて唯一のピアノ一基が幼稚園遊戯室にあるばかりであった．是を弾くのは，松野クララ氏で，クララに弾いてもらっては，幼児一同の歌に合せて居たのである．日本人保姆は一人も弾くことが出来ない．」[7)]とあり，この時ピアノを弾いたのは松野クララ[7]であろう．

以上のように，明治10（1877）年，東京女子師範学校附属幼稚園において，皇后宮，皇太后宮を迎えての開園式当日（同年11月27日）と，その準備のための唱歌授業（同年11月6日）において，松野クララが『保育唱歌』の伴奏にピアノを用いたことが，保育におけるピアノの初めての使用である，と位置付けられる．

### 3．日常の保育におけるピアノの使用

附属幼稚園において日常の保育では，ピアノはどのように使われていたのだろうか．

明治10（1877）年の保育時間割表によれば，各組週1回木曜日に30分間の「唱歌」が保育科目として組まれ[8)]，明治11年（1878）年9月頃には，週2日月曜日と木曜日に30分間，式部寮伶人による幼稚園への出張授業が行われている[9)]．『日本幼稚園史』では，唱歌の様子を「附属幼稚園では週2回，月曜と木曜の朝の集まりで，松野クララは幼児一同の歌に合わせてピアノを弾いた．このピアノ演奏を，幼児は勿論のこと，保姆や練習生も大変楽しみにしていた」[10)]と伝えている．明治11（1878）年2月から8月にかけての附属幼稚園の保育見習い生，氏原銀の手記[11)]からも，当時の様子を知ることができる．

> 唱歌ハ洋琴ニ合シテナスハ一週中月水ノ二回ニシテ朝会ノ集リノ時クララ保姆之ヲ弾ジテ幼児一同唱歌ニ和ス此月水若シクララ氏欠勤ナレバ楽器ヲ弾ク者ナキニヨリ楽器ニ和セシテ唱歌ス之他ノ保姆未タ洋琴ヲ弾ク知ラサルニヨル遊戯ヲナスニハ楽器ニ和スルナク唯唯保姆幼児ト共ニ唱歌シツツナセリ

これらの資料から，週2回朝の集会で，幼児はクララのピアノ伴奏に合わせて歌い，クララが欠勤の場合他の保母はまだ楽器が弾けないので，保母は幼児と共に歌いながら遊戯をしていたことがわかる．

また，クララはピアノを唱歌の伴奏以外でも使用している．「保育室の出入りにピアノが奏せられ幼児はその音に

ついて歩調を整えた」[12]，或いは「唱歌終わるや奏楽に歩を合わせて一列或は二列を為して保姆或は助手之を先導して各開誘室に入る」[13]とあるように，園児が遊戯室から各開誘室（保育室：筆者註）に戻るとき，クララは幼児の歩行に合わせてピアノを演奏している．

以上のように，クララは「保育唱歌の伴奏」に，そして「幼児の行進」のためにピアノを使用した．

クララは明治12（1879）年からは宮内庁式部課雅楽部伶人4名にピアノを教え，明治13（1880）年2月に幼稚園を辞任した後には，文部省体操伝習所のピアノ奏者や女子学習院の音楽教師を務めた．中村理平（1993）は，クララを日本最初の官傭ピアノ教師として位置づけ，「洋琴伝習事始」の指導者としてその功績をたたえている[14]．

## 4．『保育唱歌』にみるフレーベルの思想と伴奏楽器

『保育唱歌』について概観する．『保育唱歌』の成立については，先の項「2．東京女子師範学校附属幼稚園における初めてのピアノ使用」で触れたが，『保育唱歌』は，明治10（1877）年11月から数年にわたり，宮内庁雅楽部の伶人と附属幼稚園保母の豊田扶雄等によって作られた．曲は宮内庁雅楽部の伶人が作曲したので雅楽調であり，歌詞はフレーベル式幼稚園教科書の歌詞を幼児向けに改訳したものや万葉集や古今集などの日本の古歌から選定したものだった．創作された保育唱歌は100曲にも及ぶが，幼稚園で頻繁に使われたものは，《家鳩》，《風車》等，遊戯を伴うものであった．

伊吹山（1979）は，文語体の歌詞と雅楽調の旋律から出来ている『保育唱歌』を山住正巳は「幼児にはふさわしくないもの」としているが，「保育唱歌100曲は，東京女子師範学校の生徒と附属幼稚園児を対象として作られたものであって，実際に幼稚園で使われたのはその3分の1の33曲だった」こと，「幼稚園で使われた歌は，歌詞を幼稚園で選定したものが大部分（33曲中28曲）を占め，これらに付いている歌詞はさほどむずかしくはない」こと，「幼稚園で使われた歌の種類は，「開誘歌」（六球法という6つの色分けされた球を使いながら歌う恩物の歌：筆者註），「遊戯の曲」，「四季の曲」等フレーベルの理論に合わせて忠実に選ばれている」と『保育唱歌』の特徴をまとめている[15]．幼稚園でよく歌われた《家鳩》や《風車》等「遊戯の曲」の歌詞と遊び方は，欧米のフレーベル式幼稚園教科書から忠実に翻訳されたものが多い．藤田（1998）は日本に伝播したフレーベル式幼稚園教科書について次のように説明している[16]．

> 東京女子師範学校附属幼稚園が「保育唱歌」作成のために参考にしたイギリス，アメリカの幼稚園書の唱歌遊戯は，いずれもフレーベル著，ローベルト・コール作曲の『母の歌と愛撫の歌』に基づくものであるが，原本のフレーベルの解説にみられる難解な哲学的，神秘的な思想は，イギリス，アメリカに渡って，より具体的な内容に変化してくる

イギリスやアメリカの幼稚園書の唱歌遊戯は，フレーベル著『母の歌と愛撫の歌』の掲載曲を，翻訳時にその国の実情に合った楽曲に置き換える等，実際の幼稚園で使い易い実践的な内容である．メロディーや歌詞は変化しても，フレーベルの本質的な思想である遊戯性，つまり子どもが歌いながら遊ぶことの重要性は引き継がれている．この点においては日本も同様で，『保育唱歌』はフレーベルの思想を具現化するためのものだったのである．

『保育唱歌』は，「唱歌（しょうが）」と遊戯を伴う歌である「遊戯（ゆげ）」に分類され，序文によれば，伴奏楽器は笏拍子（細長い板2つを打ち合わせて拍子をとる楽器：筆者註）や和琴を想定していた．

> 唱謳ノ哥ハ笏拍子ニ節を拍チ，琴に聲ヲ應和して謳フ
> 遊戯ノ歌ハ笏拍子ヲ拍チ，節ヲ左右ノ歩ニ踏ミテ謳フ[17]

ヘルマン・ゴチェフスキ（2000）は「保育唱歌の本来の伴奏楽器は和琴と笏拍子だけである．（中略）東京女子師範学校附属幼稚園にドイツ人の保母が勤めていたので，ピアノと合わせることもあった．しかしそういうのは例外で，保育唱歌の本来の演奏様式ではない．」[18]と述べている．確かに，雅楽調の唱歌に西洋楽器のピアノを合わせるというのは，曲の様式を考えれば，違和感がある．幼稚園にはピアノがあり，ピアノが弾ける松野クララがいたことから，雅楽調の唱歌であっても西洋楽器のピアノを合わせるという実験的な試みがなされたのではなかろうか．幼稚園黎明期の全てが試行錯誤の時代だからこその和洋折衷であろう．

## 5．明治14（1881）年から明治20年頃の附属幼稚園における唱歌の伴奏楽器

明治13年（1880）2月28日，松野クララは附属幼稚園を辞任する．その数日後である3月2日，音楽取調掛に招聘されたルーサー・ホワィティング・メーソン（Luther Whiting Mason 1818～1897）が来日する．メーソンは伊澤修二（1851～1918）と共に，唱歌教育を推進した人物だが，幼児教育にも大きな影響を与えた．

メーソンは，明治14（1881）年9月から明治15（1882）年7月まで附属幼稚園でも唱歌指導を行っている．ヴァイオリンが得意なメーソンは，度々園を訪れて園児にヴァイオリンを弾いて聞かせ，時にはピアノで唱歌の伴奏をした[19]．

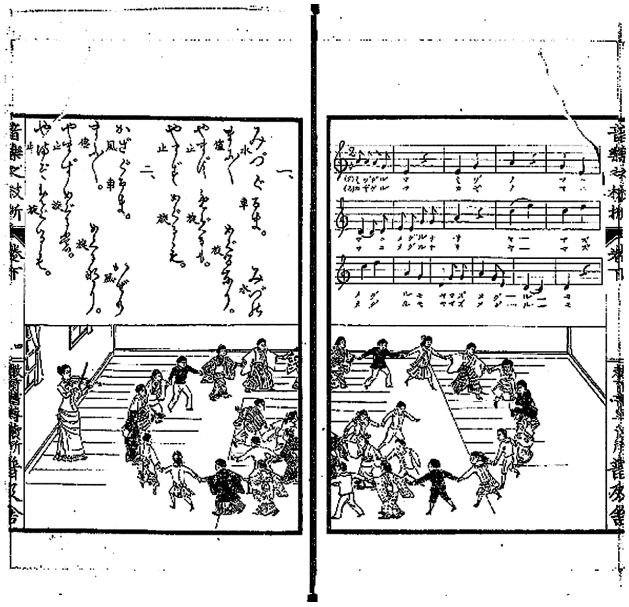
この時代の唱歌遊戯の様子を知るのには，大村芳樹著『音楽ノ枝折』が参考になる．第1章「遊戯唱歌」には，

幼稚園と小学校1，2年生を対象とした9曲の唱歌遊戯が，挿絵と楽譜付きで紹介されている．その一部に教師が弾くヴァイオリンに合わせて子どもが遊戯をしている挿絵【図1】がある．実際にどの程度ヴァイオリンが唱歌の伴奏楽器に使用されていたのかは不明であるが，大村は軽くて持ち運びがしやすいヴァイオリンが，唱歌遊戯の伴奏楽器には最適と考えていた．

> 楽器ハ風琴，洋琴及琴ヲ宜シトスト雖モ．胡弓或ハ「ヴヴイオリン」ノ軽便ナルニ若カズ．此等ノ楽器ナレバ．携帯ニ便利ニシテ．室ノ内外ヲ論ゼズ．之ヲ使用スルコトヲ得．殊ニ「ヴヴイオリン」ハ遊戯ヲナスニ當リテモ．亦之ヲ用井ルコトヲ得ルヲ以テ之ヲ奏スレバ最妙ナリトス．[20]

ヴァイオリンは明治10年代から国産品が試作され，明治20年代に入ると，鈴木ヴァイオリンが圧倒的に業績を伸ばし，ピアノやオルガンよりも安くて手に入りやすい身近な西洋楽器であった．音楽取調掛は唱歌教育にヴァイオリンが使えるのではないかと考え，明治15（1882）年に制定した『音楽取調事務大要』では「学校唱歌ニ用イル所ノ楽器ハ本邦ノ琴，胡弓，西洋ノバイオリン（原文ママ），風琴，洋琴ト定ムベシ」[21]と，学校で用いる楽器の中にヴァイオリンを挙げている．しかしヴァイオリンは，調弦や弾くのが難しく，演奏技術の習得に時間がかかる等の理由からか，しだいに扱われなくなる．

以上のように，東京女子師範学校附属幼稚園では，クララとメーソンという2人の音楽に精通した西洋人との関わりから，他の園よりはるかに早い時期からピアノやヴァイオリンという西洋楽器が導入された．明治14年頃からは



**【図1】唱歌遊戯「風車」**
**大村芳樹（1887）『音楽ノ枝折／巻下』，普及舎，p.3**

「保母の中にピアノやヴァイオリンなど西洋楽器を演奏できる者もあらわれた」[22]とある．外山（1978）は，この保母とは明治11（1878）年12月に着任した横川楳子であろう，としていて，その理由には，横川は明治11年から6年間式部寮伶人に『保育唱歌』や和琴を習い，加えてメーソンや音楽取調所で西洋唱歌と風琴の修業をした経歴があることをあげている[23]．明治20（1887）年9月から附属幼稚園の保母になった下田たづの回想録にも，「保母たちは競ってピアノの勉強をした」，「ヴァイオリンを弾く保母もいた」等が記されている[24]．このように，西洋楽曲の唱歌の広がりと共に，保母たちにも西洋楽器が浸透していく．

## 6．地方の幼稚園における唱歌の伴奏楽器

附属幼稚園の創立から3年が過ぎた頃から，各地方にも幼稚園が誕生し始める．明治12（1879）年4月に開園した鹿児島幼稚園の設立には，附属幼稚園の豊田芙雄が深く関わっている．「わけても音楽は，琴，笏拍子，歌などの合奏によりてなされたるものにて，未だ洋楽の発達せざる当時のことなれば，総て豊田女子の苦心の作になった」[25]と，唱歌教育にとりわけ苦心し，伴奏楽器には琴，笏拍子を用いていることがわかる．

明治13（1880）年5月，大阪では町立の愛珠幼稚園が開園する．幼稚園の創立者である滝山瑄は「幼稚園創設苦心談」の中で，楽器を調達するだけでも大変だった創設当時の様子を語っている[26]．

> 幼稚園は創立されましたが器具がない楽器がないと言う有様であります．（中略）楽器がないのでオルガンの代わりに琴と笏拍とでするので有ります．何と言ふても其時は京都迄行かねば琴がないと言う時代なので有りました．保姆は毎日練習して琴ブルンブルン笏拍カチカチと言はして居るので有ります．

地方の幼稚園では，唱歌の伴奏楽器として琴や笏拍子を用いたようである．しかし，「オルガンの代わりに」という文言に見られるように，ピアノやオルガンが良いが，手に入らないので琴や笏拍子を使っている，という意識が伝わってくる．その後愛珠幼稚園は，明治16（1883）年6月にピアノを購入し，唱歌に使用したとの記述も残っている．一方，20年代の一般的な幼稚園では「幼児の唱歌や遊戯の指導にあたって調子をとる場合も，総て教師が手を叩いて済ますところが少なくなかった．」[27]とあり，それが実情だった．

## 7．音楽取調掛による唱歌教育～西洋音楽の導入

メーソンや伊澤を中心とした音楽取調掛は，本格的な唱歌教育の普及に向けて，明治14（1881）年11月，『小学

唱歌集　初編』の発刊を初めとして，『第二編』，『第三編』，『幼稚園唱歌集』を相次いで刊行した．『幼稚園唱歌集』は明治 20（1887）年の刊行だが，緒言の日付は「明治一六年七月」であり，明治 17（1884）年の附属幼稚園に残る記録には「幼稚園唱歌集は未だ出版せざれども稿本のまま假りに用ふ」[28]とあり，実際にはもう少し早く編集されていたようだ．

これらの曲集の大きな特徴は，西洋楽曲であることだ．一部は取調掛で新しく作られた曲だが，多くは外国曲に文語調の歌詞を付けたものである．『小学唱歌集　初編』には《むすんでひらいて》《蝶々》，『幼稚園唱歌集』には《うずまく水（きらきら星）》《蜜蜂（ぶんぶんぶん）》等，今日でも広く知られている曲が収録されている．附属幼稚園の監事だった小西信八（監事在職期間：明治 13 年 9 月～明治 23 年 4 月）は，「歌の調子が活溌で子供によくあうような調子なので，子供も喜びました」[29]と，西洋楽曲の唱歌が子どもたちに受け入れられた様子を語っている．このように音楽取調掛による唱歌教育が幼児に西洋音楽をもたらした意義は大きい．

しかしながら，音楽取調掛が推し進めた唱歌教育は，「教科教育としての音楽」として初等教育を主眼としていた．メーソンの指導法では，「最初に歌曲をうたうのではなく，最も基礎的な音階，リズム，拍子等を練習し，そして，次に歌曲をうたうのである」[30]というように，段階的な基礎技能の習得が重視された．これは小学校の「唱歌」という教科が念頭にあるからである．メーソンはアメリカの初等音楽教育においてその手腕をふるい成功と名声を得た人物であり，フレーベルや松野クララ等が，『保育唱歌』で目指した唱歌教育とは，おのずと異なっていたのではなかろうか．

『保育唱歌』は，欧米のフレーベル式幼稚園教科書から歌詞と遊び方を忠実に翻訳し作成しているので，フレーベル主義保育の根幹といえる「遊戯性」が取り入れられている．歌の種類は「開誘歌」，「遊戯の曲」，「四季の曲」等があり，日常の保育と密接に結びついた歌が多い．藤田（2008）は音楽取調掛が刊行した『幼稚園唱歌集』が，実際の保育現場では『保育唱歌』よりも根強くなかったことを指摘し，その理由には，歌詞が文語体で幼児に理解されにくい，西洋楽曲が難しかった，そして，遊戯法が付記されていないので「遊びながら歌う」幼稚園では使いにくいことを挙げている[31]．このように音楽取調掛による唱歌教育は，遊びながら歌うという「遊戯性」が失われ，「音楽教育のための教材」としての唱歌へと質的な転換がなされてしまったのである．

## 8．西洋楽器の導入と普及

音楽取調掛は，唱歌教育を普及させるには，楽器の普及が不可欠なものと考えていた．

> 唱歌ノ楽器ニ於ケルハナホ車ノ車輪ニ於ケルガ如ク彼此相須テ始メテ用ヲ成スモノニシテ唱歌ニ楽器ナキトキハ音楽モ全ク功ヲ奏スル能ハス．[32]

上文は明治 17（1884）年に音楽取調掛が政府に提出した『音楽取調成績申報書』「学校用楽器ノ適否研究ノ事」の一部である．音楽取調掛は，「唱歌にとって楽器は車と車輪のように両方があって始めて用をなすものである，楽器がないと全く音楽の効果がない．」と強く楽器の必要性を主張している．この姿勢は，『幼稚園唱歌集』（音楽取調掛，明治 20（1887）年刊）の緒言にも如実に現れている．緒言には，幼稚園における唱歌教育の目標や意義，指導上の留意点等が 3 点挙げられ，4 点目に伴奏楽器に関する記述がみられる．

> 一　幼稚園ニハ，箏，胡弓，若クハ洋琴，風琴，ノ如キ楽器ヲ備ヘテ，幼稚ノ唱歌ニ協奏スルヲ要ス．是レ楽器ニヨリテ，唱和ノ勢力ヲ増シ，深ク幼心ヲ感動セシムルノ力アルヲ以テナリ．[33]

ここでは，「幼稚園には楽器を備えて，幼児の唱歌に合わせることが必要である」，「楽器で伴奏すると唱和の力が増し，深く幼心を感動させることができる」と，楽器を使用することの目的が述べられている．

本来，歌うことは楽器による伴奏がなくても成立する音楽表現である．しかし音楽取調掛は，「楽器がないと全く音楽の効果がない．」と言うほど，楽器が唱歌に必要であるという見解がみられる．このように考えたのはなぜだろうか．

今のように西洋音楽が耳に馴染んでいない時代，日本人の音感覚にはない西洋音楽の習得は日本人にとって難しかったようだ．奥中康人（2008）は，伊澤修二がアメリカ留学の際，ドレミファソラシドを歌うと，ミとかファが「皆上がり過ぎて」，「謡うことなど，どうしてもよく出来なかった」ことや，メーソンの「日本人学生が西洋音楽の勉強を始めた時，彼らは西洋の音階を理解することが大変に困難であることがわかった」という言葉を挙げながら，当時の日本人は西洋音階を歌うのが苦手であった事実を述べ，その原因は「西洋（七音音階）と日本の（五音音階）の音階が異なっている」からだと指摘している[34]．

西洋の音階，すなわち長音階であれば「ドレミファソラシド」は，明治初期の日本人にとって異文化との出会いであり，その受容において違和感があったのは当然であろう．そうであるならば，日本人の音感覚とは異なる西洋音階からなる西洋楽曲の唱歌は，楽器で音を確認しなければ

うまく歌えず，そこに楽器の必要性が生じたのではなかろうか.

また緒言では，幼稚園に備える楽器として「箏，胡弓，または洋琴，風琴」を挙げている．明治初期の西洋音楽導入期の史実をまとめた『音楽教育成立への軌跡』(1976) には，「音楽取調掛は当初，古来より日本でなじみがあり比較的手に入れやすい琴や胡弓をその代用楽器として使うことを計画していたが，実際には琴，胡弓は普及せず，風琴のほうが普及した」[35]とある．市川（1995）は，琴，胡弓が普及せず，オルガンが普及した理由を「西洋の音楽に接していなかった教師たちが，西洋音楽の音階を用いた唱歌を正確に教えるためには，正確な西洋音階がどうしても必要になる（中略）それには自分の耳に頼って調弦しなくてはならない箏，胡弓ではなく，手を加えずに西洋音階をもたらしてくれるオルガンが最適と判断されたのであろう.」[36]と述べている．この記述は小学校でのオルガンの普及について述べたものものだが，幼稚園も同じ状況下であろう.

オルガンの国産化は明治 21（1888）年から[37]，ピアノの国産化は明治 33（1900）年から[38]始まった．オルガンは 30 年代に入って国産品の生産が本格化するに伴い次第に普及し始め，40 年代に急激に需要を伸ばしたという[39].

音楽取調掛は，『小学唱歌集』や『幼稚園唱歌集』等，唱歌教育に必要な教材の作成，編纂，出版と並んで，教具である伴奏楽器の普及にも精力的に力を注いでいく．この方向性が「唱歌には楽器が必要」という意識の醸成に大きく関わっているのではなかろうか.

唱歌教育が広まり西洋音楽が教育の場に浸透するのに従って，おのずと伴奏楽器への意識や必要性が高まり，この流れがゆくゆくは，明治 32（1899）年制定の『幼稚園保育及設備規程』[8]で，幼稚園に必要な設備備品として，「楽器」が示されることにつながるものと考える.

## 9．おわりに

日本の保育でピアノを伴奏楽器として使い始めたのはいつ，どこで誰によってだったのか．本稿では，明治初期を中心に歴史的資料の分析と考察を行い，保育におけるピアノ使用の源流をたどることを試みた.

明治 10（1877）年，東京女子師範学校附属幼稚園において，皇后宮，皇太后宮を迎えての開園式当日（同年 11 月 27 日），並びにその準備のための唱歌授業（同年 11 月 6 日）の中で，松野クララが『保育唱歌』の伴奏にピアノを用いたことが，保育における初めてのピアノ使用である，と位置付けられる．日本初の公立幼稚園であり，創成期の幼稚園教育を牽引した東京女子師範学校附属幼稚園の開園時から，唱歌の伴奏にピアノが使われていた．この時ピアノが弾けたのは，ドイツ人保母の松野クララだけであり，クララは保育の中でピアノを 2 つの目的，「保育唱歌の伴奏」と「幼児の行進」のために使用した.

一方，メーソンや伊澤を中心とした音楽取調掛の唱歌教育によって，唱歌には伴奏楽器が必要であるという意識形成がなされたことにも注目したい．明治 17（1884）年，音楽取調掛は「楽器がないと全く音楽の効果がない.」，「楽器で伴奏すると唱和の力が増し，深く幼心を感動させることができる」と，唱歌には伴奏楽器が必要であるという考えを示す．この方向性が，明治 32（1899）年制定の『幼稚園保育及設備規程』において，幼稚園に必要な設備備品として「楽器」が挙げられることにつながり，ひいては今日の保育現場にピアノが置かれることのひとつの端緒となったのではなかろうか.

次の課題としては，頌栄保母伝習所や頌栄幼稚園における A. L. ハウの幼児音楽について検討し，明治期の保育におけるピアノ使用について更に研究を深めたい．保育者養成校におけるピアノ教育の歴史的な変遷を考察し，今後の保育者養成に役立てたいと考えている.

## 註

1］専門的職業能力として重視するものについて，養成校である短期大学と，就職先である幼稚園と保育園の双方にたずねた調査研究である．具体的保育知識や実践力として重視するものは何かを尋ねたところ，「ピアノの技術」が養成校ではトップであり，幼稚園においても高スコアであった．佐藤弘毅（2011）『短期大学における今後の役割・機能に関する調査研究』，文部科学省，平成 21-22 年度先導的大学改革推進委託事業

2］昭和 31（1956）年制定『幼稚園設置基準』において，ピアノ又はオルガンの設置が義務付けられた．「第十条　幼稚園には，次の園具及び教具を備えなければならない（中略）四　ピアノ又はオルガン，簡易楽器，蓄音機及びレコード…」

3］明治期の高等女学校など中等教育機関を中心としたピアノの教育は，市川理恵による「明治期における教育の場へのピアノ導入」（1995，『人間研究』31 号，日本女子大学心理・教育学会，pp.25-31）が詳しい.

4］音楽取調掛 [ 明治 12（1879）年～明治 20（1887）年］や，東京音楽学校 [ 明治 20（1887）～昭和 27（1952）年］等，音楽教師や音楽家を養成するための専門機関で行われたピアノ教育については，国府華子の「わが国における明治期のピアノ教育―音楽取調掛，東京音楽学校を中心に」（1999，『音楽教育史研究』第 2 号，音楽教育史学会，pp.25-36），市川理恵の「音楽取調掛におけるピアノ教育の導入」（1996，『人間社会研究科紀要』第 2 号，日本女子大学，pp.41-51）や，「音楽取調掛，東京音楽学校を中心に」（1999，『音楽教育史研究』第

2号，音楽教育史学会，pp.1-11）等がある．

5］明治初期の保育の研究には，東京女子師範学校附属幼稚園を中心とした『日本幼稚園史』（1956，倉橋惣三，新庄よし子，臨川書店），『日本幼児保育史』第1巻（1968，日本保育学会，フレーベル館）等，明治初期の唱歌教育は，藤田芙美子による「保育唱歌研究―フレーベル式幼稚園唱歌遊戯移入の経過を中心として」（1978，『創立五十周年記念論文集』，国立音楽大学）や「音楽取調掛編纂『幼稚園唱歌集』における欧米幼稚園唱歌・学校唱歌のとり入れ方」（1980，『幼兒の教育』第79巻，2号，pp.44-55），外山友子による「幼稚園唱歌事始」（1978，『東洋音楽研究』，第43号，pp.1-51），伊吹山真帆子による「保育唱歌について」（1979，『東洋音楽研究』第44号，pp.1-26）等の優れた研究があり，本論文をまとめるにあたり，引用または参考とした．

6］明治十年十一月廿八日（水曜日）の東京日日新聞は東京女子大学図書館所蔵のマイクロフィルムを，明治十年十一月廿九日（木曜日）の読売新聞は明治大学中央図書館所蔵のマイクロフィルムを閲覧した．

7］松野クララ（1853-1931）は，ベルリン生まれのドイツ人である．ドイツで知り合った林学者松野礒（まつのはざま）と結婚するためにクララは明治9（1876）年に来日．東京女子師範学校で臨時の英語教師を経て，フレーベル主義の保育を学んでいたことから附属幼稚園の主席保母に就任する．クララは保母や保母練習科生徒に保育法を教授するなど，幼稚園の創成期に大きな影響を与えた．

8］明治32（1899）年6月，幼稚園に関する最初の省令，『幼稚園保育及設備規程』が制定された．保育の目的，保育項目，必要な設備，保育時間等が示され，教育機関としての幼稚園の全国的基準が示された．第7条の三には，幼稚園に備えるものとして楽器が挙げられている．「恩物，絵画，遊戯道具，楽器，黒板，机腰掛，時計，寒暖計，暖房器其他須要ナル器具ヲ備フヘシ．」

## 引用文献


1）武石みどり（2009）「明治初期のピアノ―文部省購入楽器の資料と現存状況―」『東京音楽大学研究紀要』，33号，pp.1-21

2）武石みどり，同掲書1），p.18

3）武石みどり，同上

4）「東京女子師範學校年報」『文部省第五年報』（1877），文部省，p.393

5）曽我芳枝（2008）「唱歌遊戯の成立過程に関する研究：『雅楽録』にみられる『保育唱歌』の作成過程から」『体育学研究』，第53号，p.301，pp.297-313

6）「東京女子師範學校年報」『文部省第六年報』（1878），文部省，p.320.

7）倉橋惣三，新庄よし子（1956）『日本幼稚園史』，臨川書店，p.236

8）津守真，村山貞夫（1968）「14．東京女子師範学校附属幼稚園の創立と保育課程」『日本幼児保育史』第1巻，日本保育学会，フレーベル館，pp.95-96

9）曽我芳枝，前掲書5），pp.303-304

10）倉橋，新庄，前掲書7），p.237

11）前村晃，高橋清賀子，野里房代，清水陽子（2010）『豊田芙雄と創成期の幼稚園教育』，建帛社，p.236

12）倉橋，新庄，前掲書7），p.81

13）倉橋，新庄，前掲書7），p.414

14）中村理平（1993）『洋楽導入者の軌跡―日本近代洋楽史序説―』刀水書房，pp.215-222

15）伊吹山真帆子（1979）「保育唱歌について」『東洋音楽研究』第44号，p.22，pp.1-26

16）藤田芙美子（1998）「日本の幼稚園と学校教育の開始に影響を与えた欧米フレーベル主義幼稚園教育」『異文化交流と近代化―京都国際セミナー1996―』，p.212，pp.208-213

17）江崎公子編（1991）「保育並遊戯唱歌の撰譜」『音楽基礎研究文献集』第15巻，大空社，p.19

18）ヘルマン・ゴチェフスキ（2000）「保育唱歌について」『原点による近代唱歌集成―誕生・変遷・伝播―』，ビクターエンタテイメント株式会社，p.187，pp.186-191

19）倉橋，新庄，前掲書7），p.284

20）大村芳樹（1887）「教師ノ心得」『音楽ノ枝折/巻下』，普及舎，p.29

21）「学校唱歌ノ事」「創置処務概略」『音楽取調成績申報書』（1884），音楽取調所，pp.35-36

22）倉橋，新庄，前掲書7），p.238

23）外山友子（1978）「幼稚園唱歌事始」『東洋音楽研究』第43号，p.18，pp.1-51

24）下田たづ（1933）「お茶の水時代：思ひでをたどる」『幼兒の教育』第33巻1号，p.67，pp.62-67

25）倉橋，新庄，前掲書7），p.136

26）日本保育学会共同研究小委員会（1961）「日本幼児保育史の研究，九，滝山瑄による愛珠幼稚園の回想談」『幼児の教育』，60巻，第7号，p.63，pp.62-72

27）文部省（1969）『幼稚園教育90年史』，p.97

28）倉橋，新庄，前掲書7），p.289

29）倉橋，新庄，前掲書7），p.283

30）外園康子（1870）「明治時代における唱歌教材の性格―「小学唱歌集」「小学唱歌」―」，『教育学雑誌』第3，4合併号，p.63，pp.63-83

31）藤田芙美子（2008）「音楽取調掛編纂「幼稚園唱歌集」

における欧米幼稚園唱歌・学校唱歌の取り入れ方」『幼児の教育』79 巻，第 2 号，pp.50-51，pp.44-55
32）「学校用楽器ノ適否研究ノ事」，『音楽取調成績申報書』（1884），音楽取調所，p.311
33）文部省（1969）「幼稚園唱歌集」（抄）『幼稚園教育 90 年史』，p.634
34）奥中康人（2008）「日本と西洋の音階の相違」『国家と音楽　伊澤修二がめざした日本近代』，春秋社，pp.142-149
35）村尾忠廣（1976）「第 2 節　学校唱歌の開設と地方への普及」『音楽教育成立への軌跡』浜野政雄監修，音楽之友社，p.419
36）市川理恵（1995）「明治期における教育の場へのピアノ導入」『人間研究』31 号，日本女子大学心理・教育学会，p.27，pp.25-31
37）赤井励（2006）『オルガンの文化史』，青弓社，p.57
38）西原稔（1995）『ピアノの誕生』，講談社，p.235
39）増井敬二（1980）「21．大阪三木楽器店の戦前の山葉オルガン販売実績」『データ・音楽・日本』，民主音楽協会，p.23

付記：本稿は，日本保育学会第 66 回大会（2013 年 5 月 11 日，中村学園大学/中村学園短期大学部）における口頭発表「保育におけるピアノ（1）―ピアノ使用の原点を探る―」をもとに，新たな知見を付加し再構成したものである．

**Abstract**

In this paper, the author investigates the origin of the use of the piano in early childhood education in Japan. Clara Matsuno played the piano to accompany “Hoiku Shoka” on November Meiji 10 (1877), which was the first time in Japan, for the opening ceremony of Kindergarten of Tokyo Women’s Teacher Training College. Later in this kindergarten, L.W. Mason also played violin to accompany “Shoka”. Although the number of preschool teachers who were able to use piano or violin was gradually increasing, it was still limited at that time. Many teachers could do nothing except clapping their hands whilst singing “Shoka”.